

弔 辞

村落社会研究会代表 中 村 吉 治

今日は村落社会研究会の公けの立場にありますので、よそよそしい言い方になつても御許し下さい。

村研は二人が同時に属している唯一の会でした。長い間御指導を賜わり、同じ農村研究に主力を置いて、別々に歩いているとは思つたこともないのにこうなつてゐるのを、私だけは興味深く思ひかえしています。

それまで長い年月でした。小学生の私が中学生のあなたに、冒険世界・武俠世界を頂いて、日本少年の世界から引き出されたあたりから記憶にあります。それから中学・高等学校へ、その間にあなたは大学から社会人へ、いつも一歩前を進みながら、いろいろ教えてくれました。夏・冬の休みには帰省されたからです。夏休みには毎日天竜川へ泳ぎに行き、あとは小学校へ行つて、レコードをかけた。絵や文学の話の聞いたり、中学校では習えないことを教えられました。そして時がたつにつれて朝鮮旅行の話、その美術や宗教の話、民芸品のことから、柳宗悦氏の仕事の話、武者小路氏の話から白樺の話など次々にありました。大半はよく分らなかつたけれど何となく楽しい夏の日々でした。

東京ではピアノをひいたり作曲劇作したり、自由な生活をしていくという噂がありました。郷土研究・柳田国男というような話が

だんだん多くなりました。郷里が好きで農村をいつも考えていたのだから当然のなりゆきだったのでしょう。

私が大学に入り、東京に住むようになって新婚の御家庭へ頻繁におたずねするころ、柳田国男氏の雑誌「民俗」の編集スタッフになつていました。民俗学で排する古文書を私はいじっていましたが、それはそれで激励して貰いました。

御住居が逗子に移つても、日曜には出かけてお話を聞き、海で泳ぎ楽しい日を過ぎて貰つたのでした。そしていわゆる封建論争が燃えしきるころ、全く別の角度から地主・小作の研究をはじめ、私が仙台へ移つてから大著となつたわけです。その真価はもつとあとで認められることになつたのですがその主題の追求と広がりは、目をみはるようでした。

戦後、とうとう月給とりになつたということ、今度ばかりは私がか先輩だと笑つたのですが、忽ち立派なお弟子を養成されたのは当然といえましょう。

私は書くものについていつも批評されましたけれど、どうも村に入つての調査が少ないというおことが多かつたのは、御自身の方からいって当然だつたでしょうだから一九五一（昭二六）年に岩手県の村の調査をはじめたときは大変に力を入れた声援を下さり、それが数年後に一冊にまとめられたときは、私が驚くほどの喜びの言葉を頂いたのです。

この調査の進行中、一九五三年に村落社会研究会が結成され、お誘いをうけたわけです。社会学の人たちと農村研究会の会を作り、経

済・法・文化一般ひろく人を集めようというので、私たちも喜んで参加しました。人のふれあいを大切に、ざつくばらんの話しあいを自由にしようという御人柄のとおり趣旨でそれは文句ないことでした。発会が仙台だつたこともあつて、私どもも張切つたのですが当日の会員の熱気はすばらしいものでした。こまかい規則はなし、会長もなし、目的を同じうする人々が各方面でしていることをぶつかけあい話しあうという趣旨はその後も続けられました。深夜に及んでなお足らず夜を徹することもあるというので、一泊合宿の学会というめずらしい習慣もできました。

まさに御趣旨にそつて学会は成長しつづつあります。この際に御逝去ということは、学会員一同の誠に残念とするところです。しかもこの農村危機の声のたかまりの中で。

十数年前に、あの仲の良かった夫人が不治の病に倒れたのは、痛恨の極みだつたでしょう。しかしその時も病妻を看とり、本を読み原稿を書き、絵を見、充実した晩年だと思つていと気迫のこもつたお言葉に驚きました。その上に女子大学学長とは、常に責任をもつ人だけに無茶ではないかと、忠言めいたことを申し上げたときもいや充実した人生こそ尊い、と静かに答えられました。そしてマラソンをし、体操し、いつも私にも強調されました。私も近い所へ来ながら容易にお目にかかれず、電話ばかりでしたが、お互いに訪ねあうのを面倒だから、どこか出先で飯でも食いながらゆつくり話そうと電話のたびにいいあいながら果たせませんでした。夏の終りにまた体操をすすめられ、もう一冊本を書くというので、私は体操は

まだですが本は二冊書きましようといつて両方で笑いだしたのが最後の電話でした。

謹んでお別れの言葉とします。